**森林・農業班　B**

# ラオス北部山地域の生業構造・物流・経済格差
## －ウドムサイ県ナモー郡の裕福村 Ay 村を事例として－

**松浦　美樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）**

キーワード：生業、世帯間経済格差、労働力、消費財、家畜
調査期間・場所：2003 年 7 月 16 日－ 3 月 17 日ウドムサイ県ナモー郡

# Income Sources, Local Network and Economic Differences in Northern Mountainous Area in Laos: A Case Study in Namor District, Oudomxay Province

**Miki Matsuura (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)**

Keywords: Livelihood, Economic difference, Labor force, Asset, Livestock
Research Period and Site: Jul/16/2004~Mar/17/2004. Namor District, Oudomxay Province, LaoP.D.R.

## １．はじめに

### 1］調査目的

本調査の目的は経済レベルの異なる村落間の関係を物の売買、交換という視点から考察することである。そのなかでも比較的裕福な 1 村（Ay 村）に拠点を置き、1 ）村内の生業構造と世帯間の経済格差を明らかにし、2 ）現在、この村で取引されている商品作物、NTFP などの流通過程とその市場を明らかにし、 3 ）ラオス革命以前と現在の生業構造と流通との比較を行う。それにより、世帯間、村落間で経済格差が起こる要因をモノの流通という側面から分析し、近年の中国市場の浸透が世帯間、村落間の格差に与えている影響を調べ、今後、調査地域の村落が直面するであろうリスクを明らかにする。現時点では 1 )、 2 ）のデータ収集が終了したところであり、現在データの入力及び、分析中である。今回は調査村 Ay 村の概要と村内の世帯間の経済格差について、全 131 世帯中、入力が終了した 66 世帯のデータに基づいて報告する。

### 2］調査地選定

調査地域の選定に際しては、ラオスでのカウンターパートである NAFRI（国立農林研究所）と SIDA( スウェーデン開発機関 ) の共同のプロジェクト調査地域であるウドムサイ県ナモー郡を選定した。調査地域の選定基準は 1 ）中国という国際市場の近隣である、 2 ）定期市等の市場がなく、経済活動は仲買人による売買が中心となっていることである。調査村の選定基準は、1 ）郡内の村落の中では経済的に裕福であり、流通の中心地である、 2 ）村内に仲買人が多く存在する、である。

### 3］ 調査項目

今回は、インタビューシートを用いて、 1 ）世帯構成、 2 ）農業生産、 3 ）家畜飼育、 4 ）NTFP 採取、 5 ）財保有に関して全 131 世帯にインタビューをした。 1 ）世帯構成では氏名・性別・年齢・教育・農業以外の職について、2 ）農業生産では、栽培作物の名前、作付け面積、生産量、販売量、販売額、販売先について調査した。さらに、 3 ）家畜に関しては飼育家畜の種類とその保有数、過去 1 年間における販売数、販売額、販売目的について、 4 ）NTFP は採集物の種類、採集量、販売量、販売価格、販売先について聞いた。 5 ）財保有に関しては、精米機、耕耘機などの農機具と車、テレビ、自転車などの家財道具の保有数と購買年、そして購買価格について調査した。

村内の経済格差を把握するために、5 段階の経済層に分類した。カードに各世帯主の名前を書き、1 （裕福層）－ 5 （貧困層）の経済層に分類してもらった。この分類は村の中の知識人 7 人（村長、第二村長、長老、女性

同盟主など）に主観的判断に基づいている。分類の基準もすべて彼らの判断基準に任せた。分類結果は 1 ）22 世帯、 2 ）30 世帯、 3 ）40 世帯、 4 ）29 世帯、 5 ）9 世帯であった。

2. 調査地域の概要

1］地理と生業

調査地域はラオス北部のウドムサイ県ナモー郡（図 1 参照）に選定した。ナモー郡はウドムサイ県の最北部に位置し、ルアンナムター県、ポンサリー県、中国雲南省と接している。調査地一帯は標高 1325m － 1025m の山がいくつも連なっている山岳地域である。

調査村と選定した Ay 村の世帯数は 131 世帯である。世帯構成人数の平均は 5.6 人である。民族はヤン族のみであり、低地ラオに分類される。調査村は約 250 年前から存在しており、この地域では古村のひとつである。Ay 村は 250 年前にヴィエトナムから 2 世帯が現在の地に移住してきた。その 100 年後にウドムサイ県ベン郡に移住をしたが、その数年後に現在の地に戻り、それ以来は定住している。1975 年の革命以前は郡の行政的には中心的な役割を果たしていた村落であった。

Ay 村の中心には NamPak 川が西から東へと流れている。この川は NamOu 川の支流であり、水源は中国にある。調査村の標高は約 860m、北緯 21 度 1 分、東経 101 度 47 分に位置し、中国に近く、国境 Muuten の約 60km 南の距離にある。Ay 村から国境までは 2000 年に道路が開通している。

村の全面積は 2312ha である。1998 年に土地区分政策が実施され、村の土地が水源涵養林 681ha、再生林 102.4ha、使用林 247.5ha、精霊林 10ha、墓地林 2.5ha、保護林 249ha、水田 283.67ha、その他 35.73ha に区分された。

村の生業は水稲耕作が主であり、その他にネギ、ニンニク、トウモロコシ、サトウキビ、スイカの生産販売、NTFP の採集販売、家畜生産を行っている。商品作物と採集した NTFP は開通した道路を北上して中国へ販売される。

Ay 村の北部には低地ラオ（タイルー族）で比較的、経済的に豊かな Kouang 村、Namgum 村、Namoko 村がある。南には、中高地ラオ（カム族）の Mainatao 村、高地ラオ（モン族、プーサン族）の Mixay 村、Pouli 村、Pousang 村がある。西部には高地ラオ（モン族）の Nammoung 村、KiewLarn 村があり、東部には中高地ラオ（カム族）の Vangween 村、Houaylak 村が位置する。この地域一帯はさまざまな民族の村落によって成り立っているが、そのなかでも、調査村の Ay 村をはじめとする低地ラオの村々は、他の中高地ラオ、高地ラオの村落よりも経済的に豊かである。一方で中高地ラオの、高地ラオの村落は貧しい。本調査地一帯はさまざまな民族が住むと同時に村落間での経済格差が大きく存在するのが特徴である。

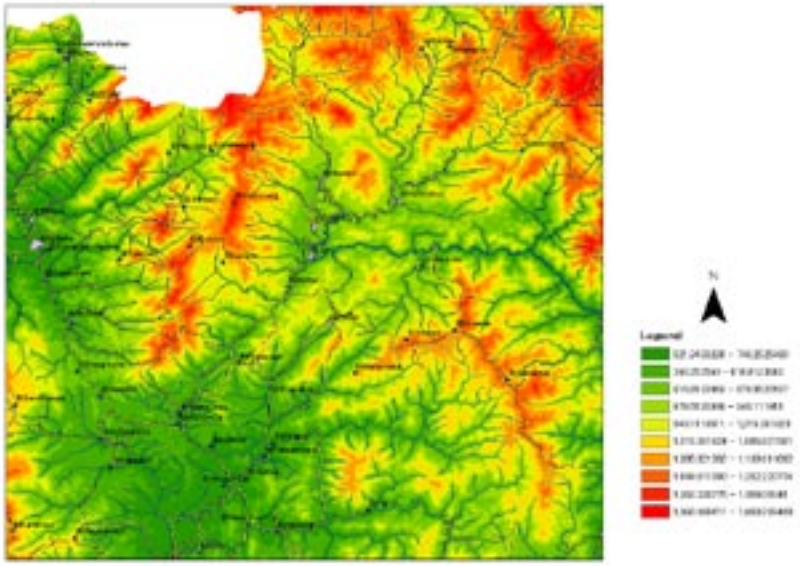

図 1　研究対象地域

2］農業の概況

(1) 水稲耕作

131 世帯のうち全世帯が水稲耕作に従事している。耕作は雨季作のみであり、乾季作を行っている世帯はない。水田の全面積は 283.67ha であり、1 世帯当りの耕地面積は 2.17ha であり、平均収量は 1 ha 当り 1.56t である。1 世帯当りの年間平均販売量 327kg であり、1 キロ当り 1000kip で販売する。多い世帯では 4t の米を販売している。稲の品種は主に Khaw Takiat Khaw ( 中稲 ) と Khaw hok ( 中稲 ) の伝統種を植えている。中には中国種を植えている世帯もある。

1979 年から 1985 年までの 6 年間にわたって、この村ではラオス政府により、サハコン（共同農業）が実施された。当時は米不足になる世帯が多く、それを補うために、焼畑をして陸稲を生産していた。収量は不明であるが、播種量は 10 － 20kg 程度であり、小規模であった。完全に陸稲生産を止めたのはサハコン終了年の次年 1986 年である。村の水田には 3 種類の土壌がある。良質の土壌は播種量 10kg に対し 700kg、中質は 400kg、劣質は 200kg の収量である。

(2) 商品作物栽培

商品作物として、ネギ･ニンニク、トウガラシ、サトウキビ、トウモロコシ、スイカの生産販売を行っている。スイカ以外の作物は以前から自給用には栽培していたが、販売はしていなかった。販売を始めたのはネギ・ニンニク、トウガラシ、サトウキビは 2000 年、トウモロコシは 2002 年、スイカは 2004 年である。販売を開始したきっかけはネギ・ニンニク、トウガラシはウドムサイから、サトウキビ、トウモロコシ、スイカは中国から仲買人が買付けに来たことによる。

ネギ･ニンニクは水田の裏作で栽培する。村全体の作付面積は 5ha であり、400kg/ha の播種量に対して収量は 1t/ha である。品種はどちらとも伝統種である。販売価格はネギが 5-7000kip/kg であり、ニンニクが 4-5000kip/kg である。10 月に植付けをし、3 月に収穫し、乾燥させる。多い世帯では約 100kg 販売している。

サトウキビは 2000 年から販売用に作付けを開始した。品種は中国種であり、郡農林局の推薦を受けた中国人が播種を直接村まで渡しに来た。2000 年から 2002 年の村全体の作付面積は 12ha である。収穫したサトウキビの価格は 100 元 /1t である。ところが、サトウキビの販売に関して、中国人の仲買人とのトラブルが発生したため、2003 年には生産を休止している。問題の原因としては、販売したサトウキビの相当金額を受け取っていない、道路沿いまでサトウキビを運ぶのが大変というものである。

トウモロコシは家畜飼料用に伝統種を以前から栽培していた。2002 年には中国人が中国種の播種をサトウキビと同様に渡しにきた。作付けは 2003 年から開始したが、播種量 15kg/ha に対して、収量は 500kg と低収量であった。販売価格は 500Kip/kg であり、仲買人は播種を渡しに来た中国人である。村の中にヴィエトナム種を植えている世帯はない。トウモロコシは焼畑地で栽培する。同地にはカボチャ、ウリ、綿、キャッサバ、トウガラシなどを混作する。

トウガラシはトウモロコシ畑に混作する。作付面積は 1 世帯当りの平均で 0.06ha と小規模である。品種は伝統種であり、2004 年は 13,000kip/kg の価格で販売している。

スイカは 2004 年から作付けを開始した。全作付面積は 1ha であり、4 世帯が植えている。品種は中国種であり、中国人が栽培指導を行っている。播種、肥料はすべて中国側が負担している。販売予定価格は 700kip/kg であり、出荷先は北京、西安を予定している。来年からは導入世帯を増やして、作付面積を拡大する予定である。導入のきっかけは、安定した収入を得られる商品作物を栽培したかったためである。

3］生業スケジュール

調査村の気候は乾季と雨季に分かれる。図 2 は調査村の 1 年間の生業スケジュールを示したものである。焼畑地で生産する作物はトウモロコシ、綿、サトウキビである。ほとんどの世帯がトウモロコシと同じ焼畑地に綿を混作している。乾季で比較的手が開いている 2 月後半から、森林を伐採し、4 月には火入れをし、5 月の点播後に除草し、8 月には収穫をする。サトウキビは 2002 年で輸出用生産は止めたが、以前はトウモロコシ、綿に比べて、遅い時期に森林伐採、火入れを行っていた。焼畑地はトウモロコシ、綿とは別の緩やかな斜面に点播し

ていた。

雨季には主に水稲耕作に従事する。雨季が始まると同時に耕起を開始し、雨季終了時の 10 月には収穫をする。収穫後の乾季には Puak Bong や Puak Muak などの換金 NTFP の採集に従事している。これらの NTFP の採集販売は世帯の重要な収入源となるため、世帯ごとの労働力が高収入を得る鍵となる。

乾季には 1 年間分の薪を集める。トラック、バイク、もしくは耕耘機を保有している世帯は年中採集し、家まで運搬することができるが、保有していない世帯は集中的に乾季に集めなくてはならない。これも労働力が重要な要素となる。

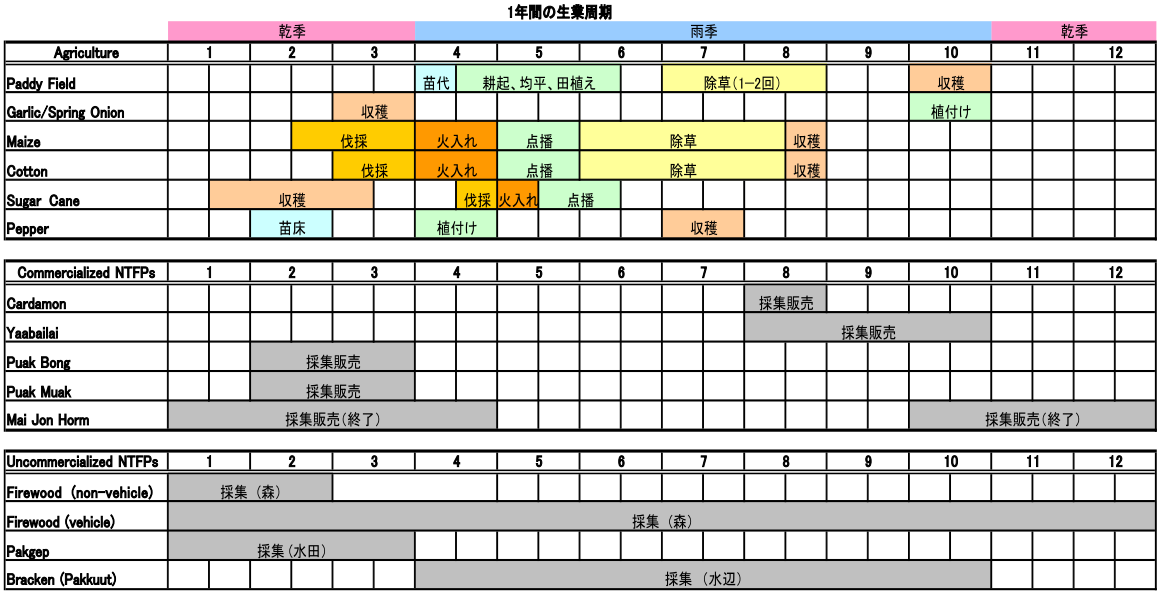


図 2　調査地の生業スケジュール

3.　調査村の経済格差

村の中にも貧富の差は存在する。豊かな世帯もあれば、そうでない世帯もある。この世帯間の格差がどのような要因で決められているのかを、労働力、農機具と家財の保有数、家畜保有数の 3 要素について、以下に考察する。

1］労働力

図 3 は世帯当たりの構成人数と労働人口を 5 段階の経済レベルごとに分け、それぞれの世帯構成人数における労働人口の割合を示したものである。Very Rich, Rich, Middle, Poor の層の世帯構成人数は 5.27 － 6.38 人、労働人口も 2.4 － 2.8 と格差はあまり大きくない。一方で、Very Poor 層の世帯構成人数は 3.63 人であり、そこに占める労働人口は 2.1 人である。Very Poor 層は他の 4 層と比較すると、世帯構成人数が少なく、労働人口も少ない。一方で、Very Rich, Rich, Middle, Poor 層の 4 層は多くの世帯構成人を多くの労働人口で支えている。この 4 層は自給自足以外の収入機会に対して労働力を配分することができるが、Very Poor 層はその余裕がないとも言える。

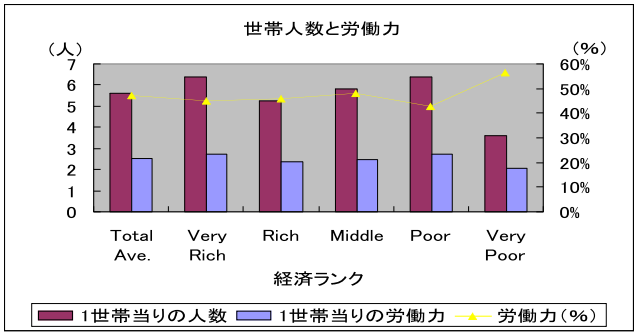


図 3　世帯構成人数と労働力

2］農機具と家財の保有

図 4 は農機具と家財の保有率を経済層ごとに示したものである。精米機は 66 世帯中 17 世帯が保有している。

そのうち 12 世帯が 1998 年以降に購入している。主には中国製を購入しているが、Very Rich 層の中にはタイ製を購入している世帯が 2 世帯ある。価格は 3 － 5,500,000Kip（$290 － 531）であり、水牛 1 頭と交換して入手した世帯もある。各層ごとに、Very Rich 層が 76%、Rich 層が 36％、Middle 層が 24％、Poor 層が 15％、Very Poor 層が 0％となっている。耕耘機は精米機よりは保有率が低いものの、同様に Very Rich 層が 50% と高く、Rich 層が 14％、Middle 層が 10％、Poor と Very Poor 層は一台も保有していない。ここから、経済レベルの高い層は保有率が高いが、経済レベルが低くなるにつれ、保有率も低くなることがわかる。格差においては、Very Rich 層とその他 4 層との保有率の差が 4 層間の差よりも大きい。農機具を保有していない世帯は保有している世帯から借りて使用する。使用料は耕耘機が 8000kip/ha、精米機が 200kip/kg である。

家財道具では、屋根の購入率（）がその他の家財道具よりもきわめて高い。屋根とは、ヤーカーと呼ばれる草からセメントへの張替えのことを意味する。購入は世帯の大多数が 5 年以内に購入している。購入に関しては現金ではなく、コメと直接交換（1 枚≒ 250kg）している世帯が多い。Very Rich と Rich 層では 100% に達し、Middle 層でも 90%、Poor 層でも 70% に達している。一方で、Very Poor 層では 25% しか購入しておらず、極端に低い。ここでは、Very Rich, Rich, Middle, Poor 層の間ではさほど格差はないが、この 4 層と Very Poor 層の間には差が大きく開いている。

自転車は 66 世帯のうち 48 世帯の 73% が保有している。購入世帯の 75%（36 世帯）は 7 年以内に購入している。保有率は Rich 層が 86％と一番高く、その次に Middle 層の 81％であり、Very Rich 層は 3 番目の 75％である。これは Very Rich 層の世帯が車、オートバイ、耕耘機を購入したことによって、より良い移動手段が確保されたためであると予想できる。Very Poor 層では 38％と他の 4 層と比べて低くなっている。

テレビは Very Rich 層の保有率が 50％と高いが、その次は Middle 層の 29％ , Rich 層の 21％である。Poor 層と Very Poor 層は一台も保有していない。また、Very Rich 層はテレビよりも農機具を先に購入する世帯が大多数であるのに対して、Middle, Rich 層は農機具を購入する以前に、テレビを先に購入する世帯が多い。保有数の格差はそれほどない。

ミシンは大多数が 1980 年代半ばに購入している。商品経済が導入される以前に購入したものであるため、過去の経済レベルを計る指標となる。Very Rich 層が 100 %、Rich 層が 79 %、Middle 層が 86 %、Poor と Very Poor 層が 38％である。Very Rich, Rich, Middle 層間はさほど変わらないが、この 3 層と Poor, Very Poor 層の間には大きな格差がある。

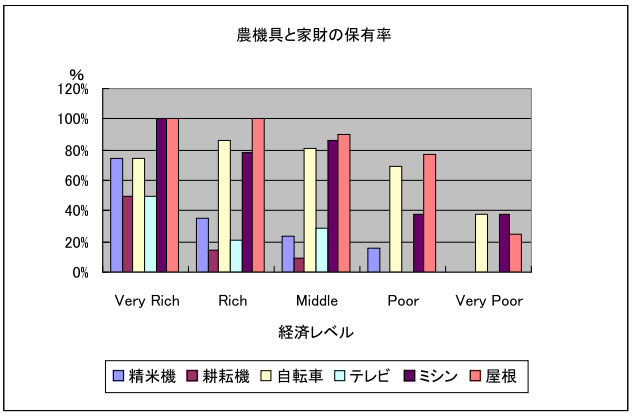


図 4　農機具と家財の保有率

3］家畜保有数

村では水牛、牛、ブタ、ニワトリ、アヒル、七面鳥を飼育している。これらの家畜の飼育は村人の生計において重要な役割を果たしている。経済層ごとの保有数（図 5、6）を貨幣価値に置き換えて考察してみる。家畜販売額の平均値（水牛 3,000,000kip/ 頭、牛 1,500,000kip/ 頭、ブタ 5,000,000kip/ 匹、ニワトリ 18,000kip/ 匹、アヒル 20,000kip/ 匹、七面鳥 70,000kip/ 匹）で計算すると表 1 のようになる。Very Rich 層は合計 1645 ドルの価値を保有しているのに対して、Very Poor 層は 477 ドルの価値しか保有していない。最裕福層と他の経済層との経済格差を考察するために、Very Rich 層の保有価値を 1 とおいて、計算した。すると、Very Rich 層に対して、Rich 層は 1.37 倍、Middle 層は 1.41 倍、Poor 層は 1.64 倍、一方で、Very Poor 層は 3.45 倍もの差がある。ここから、Rich, Middle, Poor の 3 層の差はそれほど大きくないが、Very Poor 層は他の 4 層との間に大きな経済格差があるといえる。

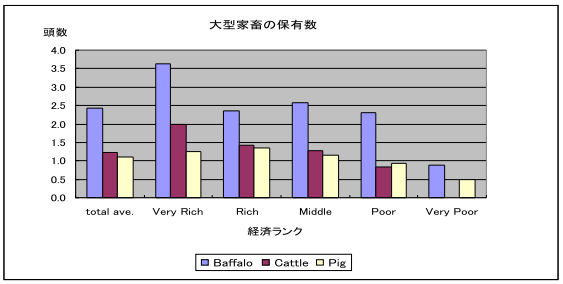


図 5　大型家畜の保有数

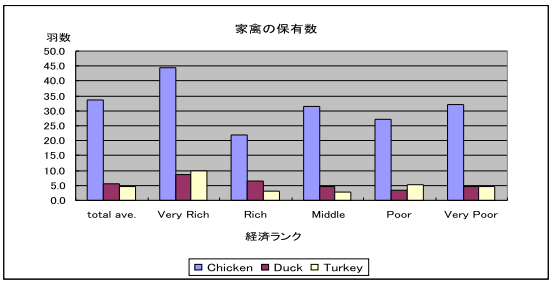


図 6　家禽の家畜の保有数

表 1　家畜保有の経済価値と格差

| Level | Kip (K) | Dollar ($) | Differentials |
|---|---|---|---|
| Very Rich | 17,030,400 | 1645 | 1 |
| Rich | 12,420,800 | 1200 | 1.37 |
| Middle | 12,041,600 | 1163 | 1.41 |
| Poor | 10,406,800 | 1005 | 1.64 |
| Very Poor | 4,936,800 | 477 | 3.45 |

4.　まとめ

これまで、ウドムサイ県ナモー郡の北部に位置する Ay 村の世帯間格差について、労働力、財、家畜の側面から考察してきた。経済レベルが高い層が労働人口、農機具と家財の保有数、家畜保有数も高く、経済レベルが低い層になるにつれて低くなる。労働力、家畜保有数、農機具、屋根、自転車からは Very Poor 層が他の層と比べて差が大きいことがわかる。

なぜこのような世帯間経済格差が出るのか、という答えに対して、労働力、家畜保有数、農機具と家財の保有率以外に、農地保有面積、収量、米の販売収入、商品作物や NTFP 販売からの収入、農外収入など、経済格差が決定されるであろう他の要因についても分析しなくてはならない。これらのデータは今回の調査で収集済であるので、今後は他の要因がどのように経済格差の決定に起因しているか、また、それらを決定づけている背景にあると思われるモノの流通について分析していく予定である。モノの流通を含めた全世帯調査のデータ分析の結果は次の機会に報告する。

5.　英文要旨

This research was conducted at one of the wealthy village, Ay village, at Namor District, Oudomxay Province to investigate the economic differences among households. Firstly, the village' s geography, livelihood was described. Secondly, village' s agricultural productions are mentioned. Thirdly, economic situation and differences within Ay village, which is the main focus of this report, is discussed. Grouping of 5 differentials are conducted by village people; Very Rich, Rich, Middle, Poor, and Very Poor. To analyze the economic differentials, 3 factors are considered; labor force, possession of equipment, and possession of livestock. As a result, it is indicated that the high economic groups possess all three factors in high rate where as the low groups have less. Furthermore, significant economic gap between Very Poor group and other economic groups exist. Further analysis will be conducted in near future.